

北 原 牧 地 区 遺 跡
坪 谷 地 区 遺 跡
地 蔵 ケ 森 遺 跡
城 原 地 区 遺 跡
松 本 遺 跡

昭和61年度農業基盤整備
事業に伴う遺跡調査概報

昭和62年3月

宮崎県教育委員会

正誤表

ページ	行	誤	正
例言	14	増田滋子	増田滋子
3	第/図	C 地区 N	i
"	"	" V	ii
"	"	" VI	iii
4	"	" VII	IV
"	"	" VIII	V
6	23	第Ⅱトレンチが	第Ⅰトレンチの
12	12	第VII層暗褐色と	第VI層暗褐色土と
16	2	農業試験所	農業試験場
16	12	壇丘部が確	壇丘部が確
16	22	埋り込みを	埋り込みが

北原牧地区遺跡
坪谷地区遺跡
地蔵ケ森遺跡
城原地区遺跡
松本遺跡

昭和61年度農業基盤整備
事業に伴う遺跡調査概報

昭和62年3月

宮崎県教育委員会

序

本報告書は、農業基盤整備事業に伴う北原牧地区遺跡（新富町）、坪谷地区遺跡（東郷町）、地蔵ヶ森遺跡（延岡市）、城原地区遺跡（野尻町）、松本遺跡（西都市）の確認調査結果を収載しました。

これらの調査は、農業基盤整備事業区内の遺跡の所在の有無、遺跡の性格、範囲等を確認して、文化財の保護と農業基盤整備事業との調整を図るために、昭和61年度国庫補助事業として実施したものであります。

調査の結果、北原牧地区、坪谷地区、城原地区では旧石器時代～中世の遺跡が確認され、地蔵ヶ森遺跡は旧石器時代、縄文時代の遺跡であることが確認されました。また、松本遺跡内に所在する国指定古墳松本塚古墳は、現長約94mの前方後円墳ですが、調査により墳丘の全長は約104mあり、盾形の周濠をもつことが判明しました。

これらの成果を収めた本書が、文化財の保護、保存に活用され、また、地域の歴史研究、社会教育等の場で役立てていただければ幸いと存じます。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、指導助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に厚く御礼を申し上げます。

昭和62年3月

宮崎県教育委員会

教育長 船木 哲

例　言

1. 本書は、宮崎県教育委員会が国庫の補助をえて実施した昭和61年度発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査は、宮崎県内の農業基盤整備事業に伴う遺跡の確認調査として実施した。
3. 発掘調査は、宮崎県教育委員会が調査主体となり、県文化課主任主事面高哲郎、同永友良典、同長津宗重、主事近藤協が担当した。
4. 調査にあたっては、当該市町教育委員会、農政部局、当該土地改良区の多大な協力があった。
5. 水田土壤観察については、宮崎県総合農業試験場化学部科長有村玄洋、同主任研究員赤木康両氏等の協力を得、その観察結果は、本書に掲載させていただいた。
6. 遺構等の実測は、面高哲郎、永友良典、長津宗重、近藤協が行い、写真撮影は面高が行った。製図は面高、八木裕子が行った。なお、遺構等の実測については、新富町教育委員会有田辰美、野尻町教育委員会脇村一也各氏の協力があった。
7. 遺物の実測・製図は、面高、増田滋子、永峰まり子、田原辰子が行った。
8. 本書の執筆、編集は面高が担当した。
9. 出土した遺物は、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

I	はじめに	1
II	調査の概要	2
1.	北原牧地区遺跡	2
2.	坪谷地区遺跡	6
3.	地蔵ヶ森遺跡	10
4.	城原地区遺跡	11
5.	松本遺跡	15
III	西都市松本塚古墳南側水田土壤断面調査	24

挿図目次

第1図	北原牧地区トレンチ配置図	3
第2図	北原牧地区土層図・出土遺物実測図	5
第3図	坪谷地区遺跡位置図・トレンチ配置図	7
第4図	坪谷地区出土遺物	8
第5図	地蔵ヶ森遺跡・坪谷地区土層図・出土遺物実測図	9
第6図	地蔵ヶ森遺跡トレンチ配置図	10
第7図	城原地区遺跡	11
第8図	西ノ牧・真崎遺跡トレンチ配置図	13
第9図	真崎・西ノ牧遺跡土層図	14
第10図	松本塚古墳トレンチ配置図及び墳丘・周濠復原図	17~18
第11図	松本塚古墳第Iトレンチ平面図・土層図	20
第12図	松本塚古墳第II・VI西・VII・IXトレンチ土層図・平面図	21~22
第13図	出土遺物実測図	23

図版目次

図版 1	北原牧地区遺跡	27
図版 2	堀田遺跡	28
図版 3	深瀬遺跡・地蔵ヶ森遺跡	29
図版 4	城原地区遺跡	30
図版 5	松本塚古墳	31

I はじめに

宮崎県は、近年、ハイテク産業等の企業誘致に努めているが、主たる産業は農業を経済基盤とする県である。そのため、農業の近代化等を図るために、パイロット事業、ほ場整備事業、特殊農地保全事業、広域農道建設事業など各種の農業基盤整備事業が県内各地で実施されている。

宮崎県内の埋蔵文化財包蔵地は、昭和51年文化庁発行の遺跡地図では、1100ヶ所余りであったが、その後の調査で未周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在することが明らかになり、昭和55年、新富町をかわりに市町村ごとに遺跡詳細分布調査を実施してきている。その結果を見ると、埋蔵文化財包蔵地は、昭和51年の数より4～5倍は存在するものと予想されている。

県内各地で実施されている農業基盤整備事業の中には、面的工事を伴うものがあり、埋蔵文化財包蔵地の範囲全域が影響を受けるなど埋蔵文化財包蔵地の保存について大きな問題が生じてきている。宮崎県教育委員会では、事業地内の埋蔵文化財包蔵地の保存を図るべく関係機関と協議を進めているところである。昭和62年度の農業基盤整備事業予定区内には埋蔵文化財包蔵地が存在する外、地形上未周知の埋蔵文化財包蔵地が存在すると予想されたので、予定区内の分布調査、遺跡の性格、範囲等を確認するため発掘調査を実施した。調査を実施したのは、下記のとおりである。

調査地	所 在 地	調 査 期 日	調 査 担 当 者
北原牧地区	児湯郡新富町大字三納代	昭和61年8月4日～8日	面高哲郎
坪谷地区	東臼杵郡東郷町大字山陰丁字穂田外	昭和61年12月22日～25日	"
地蔵ヶ森遺跡	延岡市小峰町字後田	昭和62年1月16日・17日	"
城原地区	西諸県郡野尻町大字紙屋字真崎外	昭和62年1月19日～23日	"
松本遺跡	西都市大字三納字田中	昭和62年1月26日～2月19日	面高哲郎、永友良典、長津宗重、近藤 哲
唐人町遺跡	串間市大字西方字唐人町	昭和62年3月6日・7日	面高哲郎

第Ⅱ章 発掘調査の概要

第Ⅰ節 北原牧地遺跡

1. 遺跡の位置

北原牧地区は、児湯郡新富町大字日置に所在する。日置川と鬼付女川の間には、南東へ延びる標高約60~70mの台地があり、その縁辺は侵蝕作用により形成された舌状の張り出し部が多く見られる。新富町内の台地上で確認されている遺跡の多くは、舌状の張り出し部に立地している。

2. 調査に至る経緯

児湯郡内の西都市、木城町、高鍋町、新富町においては、農業基盤整備パイロット事業（尾鈴地区、尾鈴Ⅱ地区）が実施されている。当事業に伴う発掘調査は、新富町教育委員会により藤掛遺跡（昭和56年）、川床遺跡（昭和60年）が実施されている。昭和61年度事業予定区内においては、昭和56年実施した遺跡詳細分布調査の際は西牧遺跡が存在するのみであったが、その後の分布調査で新たに3ヶ所の散布地が確認されていた。遺跡の取り扱いについて宮崎県一ツ瀬土地改良事務所と協議を重ねたが、事前に遺跡の所在の有無、性格、範囲等を把握する必要が出てきたので、昭和61年8月4日から8日まで発掘調査を実施した。

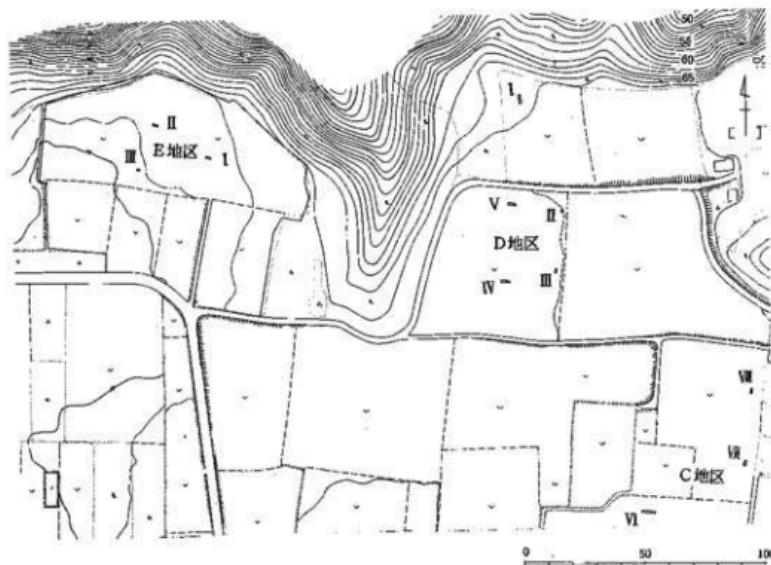
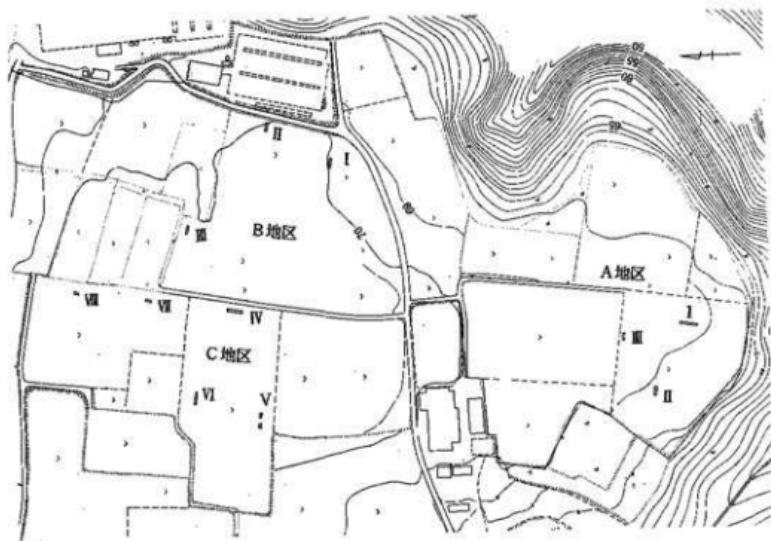
3. 調査の方法と概要

北原牧地区は、調査対象地が広範囲だったので地形等からA~E地区に分けて調査を行った。当地区の基本層序は、第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層黒色土、第Ⅲ層アカホヤ、第Ⅳ層小白斑を含む暗褐色ローム、第Ⅴ層黒褐色ローム、第Ⅵ層褐色ロームとなっている。

A地区

南へ舌状に張り出す台地上に立地する。A地区では焼石が散布し、縄文早期の集石遺構の存在が予想された地区である。当地区は、東・南・北の三方向に緩やかに傾斜し、南傾斜部分で多くの焼石が散布していた。トレンチを3ヶ所設定して調査を行う。層の残存状況は、第Ⅰトレンチがアカホヤ以下、第Ⅱトレンチでは第Ⅵ層褐色ローム以下、第Ⅲトレンチでは第Ⅳ層小白斑を含む暗褐色ローム以下が残存する。

第Ⅰ、第Ⅲトレンチで焼石が出土している。第Ⅰトレンチでは、集石遺構は検出されていないが、後世の攢乱を受けていた良好に残っている。遺物は、第Ⅰトレンチで縄文早期貝殻条痕土器、チャート製の石鏃等が出土している。



第1図 北原牧地区トレンチ配置図

B地区

舌状に張り出す台地の東縁付近に位置する。B地区では土器小片、須恵器坏片等が少量散布している。トレンチは、 $1.5m \times 5m$ を3ヶ所設定して行う。当地は耕作のための天地返しが行われており、第IV層小白斑を含む暗褐色のローム層まで擾乱を受けている。遺物は、第IIトレンチの擾乱部で土器小片が出土したのみで、遺構等は検出されていない。

C地区

舌状に張り出す台地のほぼ中央部にあたり、西へ緩やかに傾斜している。トレンチは5ヶ所設定する。第IIIトレンチ周辺には土器小片が少量散布する。B地区の第I・IIトレンチではアカホヤ最下層以下が残存するが、第IIIトレンチは、第IV層小白斑を含む暗褐色ローム中層、第IV・Vトレンチでは第V層黒褐色ローム直上まで擾乱を受けている。遺物は出土していないが、第Vトレンチで褐色ローム層より疊1点が出土している。

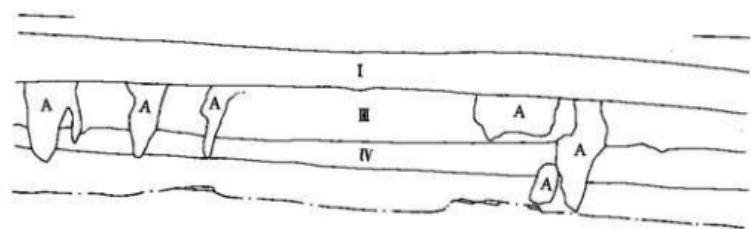
D地区

台地縁辺北縁に立地する。調査は、西傾斜面を主にトレンチを設定する。第Iトレンチ周辺には弥生土器が少量散布するが、包含層は確認されていない。第II、第IIIトレンチで溝状遺構が検出された。第IIトレンチでは、アカホヤはわずかに残存し、第IV層に掘られ東西方に向延びると思われる幅50cm、深さ10cmほどの浅い溝状遺構が隣接して2条検出されている。遺物は出土していない。第IVトレンチの溝状遺構は幅約1m、深さ約25cmあり、弥生土器が出土している。土器は刷毛目をもつ胴部片で詳細な時期は不明である。

E地区（西牧遺跡）

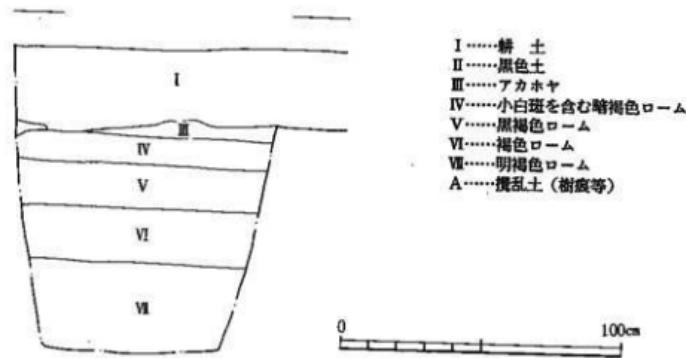
北面し舌状に張り出す台地上に立地する。当地は、遺跡詳細分布調査報告書で縄文時代の遺物散布地、西牧遺跡として報告されている。焼石が散布するが土器は採集されていない。調査は、台地北半にトレンチ3本を設定して行う。耕作等による削平が著しく、第VI層褐色ローム層以下が残存するのである。同層より泥岩ホルンフェルスの剝片が1点しているので、E地区西牧遺跡は旧石器時代の遺跡と考えられる。

北原牧地区では、5ヶ所の地区的調査を行ったが、A地区には縄文早期の文化層、D地区には弥生時代の文化層、E地区西牧遺跡には旧石器時代の文化層が存在することが確認された。B・C地区については遺物の散布が見られたが、今回の調査で遺構、包含層等に確認されなかった。



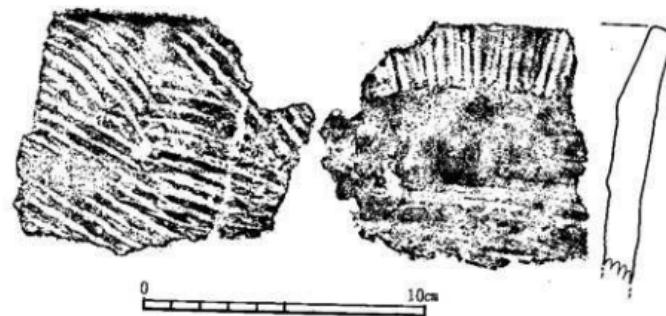
A地区第1トレンチ東壁

0 200cm



C地区第1トレンチ東壁

I ……耕土
II ……黒色土
III ……アカホヤ
IV ……小白斑を含む暗褐色ローム
V ……黒褐色ローム
VI ……褐色ローム
VII ……明褐色ローム
A ……攪乱土（樹根等）



第2図 北原牧地区土層図・出土遺物実測図

第2節 坪谷地区

1. 遺跡の位置

坪谷地区は、東舞町役場約4kmに位置し、本年度、同地区の桶田（といだ）遺跡（東舞町大字山陰丁字桶田）、深瀬遺跡（同町大字山陰丁字深瀬）の確認調査を行った。珍神山と西林山の間を東流する坪谷川沿いには、舌状に突出する緩斜面や小規模の沖積地が見られ、遺跡は緩斜面上に立地する。昭和51年、県教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査でもこの緩斜面の大半で遺跡が確認されている。

2. 調査に至る経緯

坪谷地区では、現在、坪谷川地区県営は場整備事業が実施されている。昭和60年度、県教委で昭和61年度事業予定区の分布調査、確認調査を実施したところ、縄文晚期の赤松遺跡、縄文後期及び弥生中期の下水流第2遺跡が確認され、本年度、東舞町教育委員会により発掘調査が実施されている。昭和62年事業区内にも弥生土器散布地の桶田遺跡、土器散布地の深瀬遺跡が所在していたので、昭和61年12月22日から25日までの間、発掘調査を実施した。

3. 調査の方法と概要

桶田遺跡

遺跡は、南面する緩斜面上に立地する。この緩斜面は、北半分は畑地、南半分は水田として利用されている。分布調査では、畑地の部分で弥生土器が採集されていたので調査はこの部分で実施した。トレンチは、1m×5mを基本として8本設定した。

遺跡の基本層序は、第I層耕土、第II層黒色土、第III層黒褐色土、第IV層アカホヤ、第V層粘質の暗褐色土、第VI層疊を含む粘質の褐色土となっている。

第Iトレンチは、第II層黒色土は25cm残存し、配石様の河原石及び第II層から掘られた径約75cmのピット様遺構が検出された。遺物は、縄文後期の貝殻文土器、弥生土器が出土しているが、どの遺構に伴うかは不明である。第IIトレンチが第IV層アカホヤは、約1m下にあり、この付近は若干の凹地にあたると考えられる。アカホヤ面で径約25cmのピットが確認されている。遺物は縄文後期の貝殻文土器、高环などの弥生土器が出土している。第IVトレンチでは、アカホヤは部分的に残存するが、耕土下は疊層となっている。第Vトレンチは、トレンチ南半でアカホヤ面より深さ約10cmの浅い堅穴遺構が検出された。トレンチ内で縄文土器が出土しているが、明確に遺構に伴うものでなく、堅穴の時期は不詳である。第VIトレン



坪谷地区遺跡位置図



高田遺跡トレンチ配置図



深瀬遺跡トレンチ配置図

第3図 坪谷地区遺跡位置図・トレンチ配置図

0 50 100

チ付近では、昭和60年の分布調査で弥生土器が採集されている。耕土下はアカホヤで、時期不詳の土器が検出された。

樋田遺跡では、縄文後期市来式系の頸部に貝殻腹縁刺突文をもつものや貝殻条痕文をもつ土器が出土している。弥生土器は、高環脚部、壺の口縁部等が出土しているが詳細な時期は不明である。

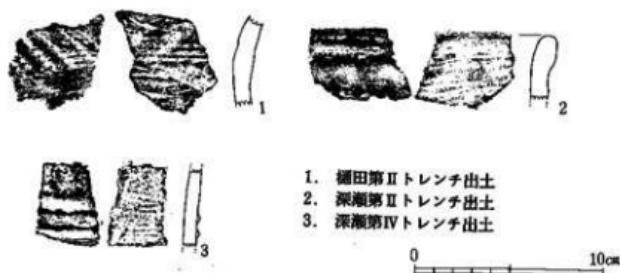
今回の調査では、良好な造構及び遺物等は出土していないが、樋田遺跡は、縄文後期及び弥生時代の遺跡と考えられる。

深瀬遺跡

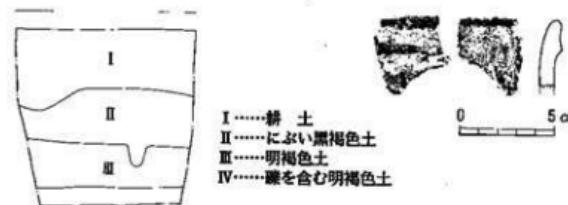
深瀬遺跡は、坪谷川をはさんだ東対岸に位置し、北面する緩斜面に立地する。当地では耕作の際などに弥生土器、撥形の打製石斧、磨製石斧、磨石等が出土している。トレンチは、1m×5mを基本として5本設定し調査を行った。

基本層序は、第I層耕土（黒褐色土）、第II層アカホヤ、第III層礫混りの黒褐色土、第IV層暗褐色土を含む疊層となっている。第I～第IVトレンチの第II層は、擾乱を受けたアカホヤで残存状態は悪い。第I・第IIトレンチで遺物が出土するが、第IIトレンチでは縄文晚期前半の突帯文土器、石鍬が出土している。第IV・Vトレンチのアカホヤは、一部擾乱を受け暗黄橙色を呈する部分はあるが残存状態は良い。造構は確認されていない。遺物は第IVトレンチでアカホヤ擾乱部分より突帯をもつ弥生土器等が出土している。なお、第IVトレンチ周辺の畠では、格子目のタクキをもつ須恵器が表採されている。

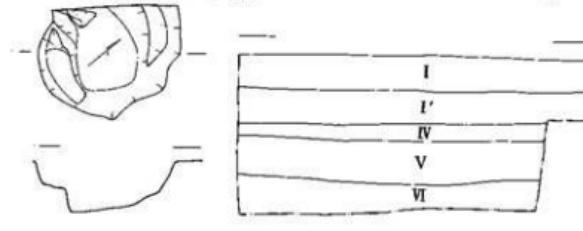
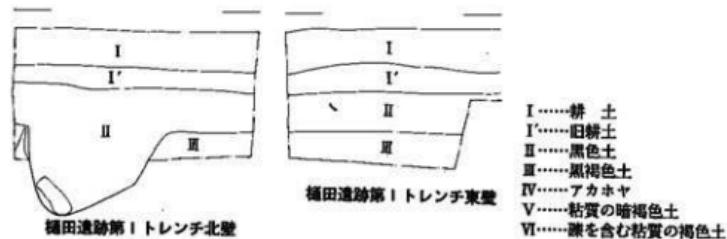
以上の調査結果から、調査地は縄文晚期前半及び弥生時代の遺跡と考えられる。



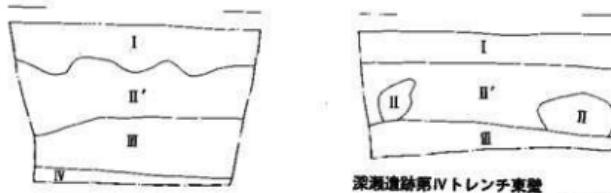
第4図 坪谷地区出土遺物



地蔵ヶ森遺跡第IIトレンチ



櫛田遺跡第IIトレンチ北壁



0 100cm

第5図 地蔵ヶ森遺跡・坪谷地区土層図・出土遺物実測図

第3節 地蔵ヶ森遺跡

1. 遺跡の位置と調査に至る経緯

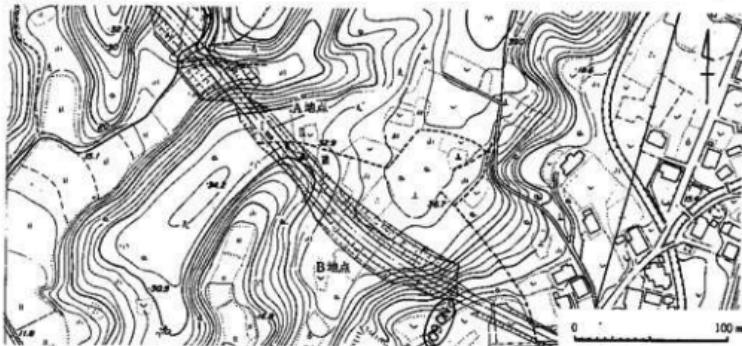
遺跡は、延岡市小峰町字後田に所在する。行勝山の南東裾部は、小河川に開析された丘陵が発達し、丘陵の中には平担部をもつものもある。地蔵ヶ森遺跡はその1つに立地する。

昭和58年より延岡市から日向市の間で広域農道建設事業が進められているが、昭和62年度事業区のうち、遺跡の可能性のある地区的分布調査を昭和61年11月実施した。その結果、後田地区A地点は、尾根状の地形で遺物等は採集されなかったが、当地が遺跡の隣接地であったので、昭和62年1月16・17日発掘調査を実施した。その際、周辺の聞き取り調査を行った結果、齊藤隆人氏（旧地主）は当地で縄文晩期の遺物の他ディサイト質溶結凝灰岩の剝片を採集している。63年度以降の工事予定区であるB地点の地形は平担であり、縄文晩期の遺物が多く散布し、A地点に比べ状態は良いと考えられる。

2. 調査の方法と概要

調査は、昭和62年度事業区で $1\text{m} \times 5\text{m}$ のトレンチ3ヶ所を設定して行った。当地の基本層序は、I層耕土、II層にぶい黒褐色土、III層明褐色土、IV層は疊混りの層となっている。第IトレンチはII層が既に消滅し、耕土下はIII層となっている遺物は、第I層で土器小片が出土する。第IIトレンチ第III層（深さ約50cm）でディサイト質溶結凝灰岩の剝片が出土する。図化した土器は、調査地内で表採されたものである。

以上より、当地は、旧石器時代、縄文時代晩期の遺跡と判断できる。縄文時代の包含層の残存状態は良好とは言い難いが、その下層の旧石器時代の包含層については、残存していると考えられる。



第6図 地蔵ヶ森遺跡トレンチ配置図

第4節 城原地区遺跡

1. 遺跡の位置

城原地区は、西諸県郡野尻町大字紙屋に所在し、高岡町との町境付近の国道268号線より以南に広がる。九州山地の南東裾部にあたる当地は、秋社川等の河川による侵蝕作用により深い谷が形成されるが、その頂部には小規模ながら平坦面ないし緩斜面となっている丘陵性台地が発達する。城原地区に所在する遺跡は、この丘陵性台地上に立地する。

2. 調査に至る経緯

城原地区及びその周辺では、現在、塗野原地区県営は場整備事業が進められている。同地域で從来知られた遺跡は、塗野原遺跡、秋社洞穴など数ヶ所であった。県教育委員会では、昭和59年より毎年次年度工事予定区の分布調査、試掘調査を実施し、工事により影響を受ける部分については野尻町教育委員会により発掘調査が行われている。昭和60年度2遺跡、昭和61年度3遺跡の計5遺跡が調査され、いずれも集石遺構を伴う縄文早期の遺跡で、うち3遺跡では縄文層の下層から旧石器時代の遺物等も出土している。

昭和62年事業区内は、中世の山城「紙屋城」跡が所在していたが、分布調査を行ったとこ



第7図 城原地区遺跡

る遺物散布地が4ヶ所新たに発見されたので昭和62年1月19日から23日までの間実施した。

紙屋城跡には土塁、空堀が一部後世の影響を受けているものの良好に残されている。平場については、農道以東が畠地造成により削平されているが西半については旧来の地形を保っていると推定される。また、東半畠の一部には、押型文土器、焼石が散布しており、縄文早期の集石遺構の存在が確認されている。このため、今回は特に紙屋城跡の発掘調査は実施していない。

3. 調査の方法と概要

今回、城原地区で発掘調査を実施したのは、遺物散布地4ヶ所及び地形上遺跡の可能性のある1ヶ所である。調査により遺物包含層が確認できたのはA・B地区の2ヶ所で、C～E地については確認されていない。

城原地区の基本層序は、第I層耕土、第II層黒色土、第III層アカホヤ、第IV層牛のすねローマ（通称カシワパン）、第V層粘質の黒色土、第VI層硬質の黒褐色土、第VII層暗褐色となっている。野尻町内では第II層上層にヤケボラの層がある場合があるが、調査地では層としては確認されず、耕作による擾乱のため第I層に混入している。当地では、個人により重機等を使用した畠地整備が行われる場合があり、調査地によっては第II層、あるいは第III層等が消滅している。

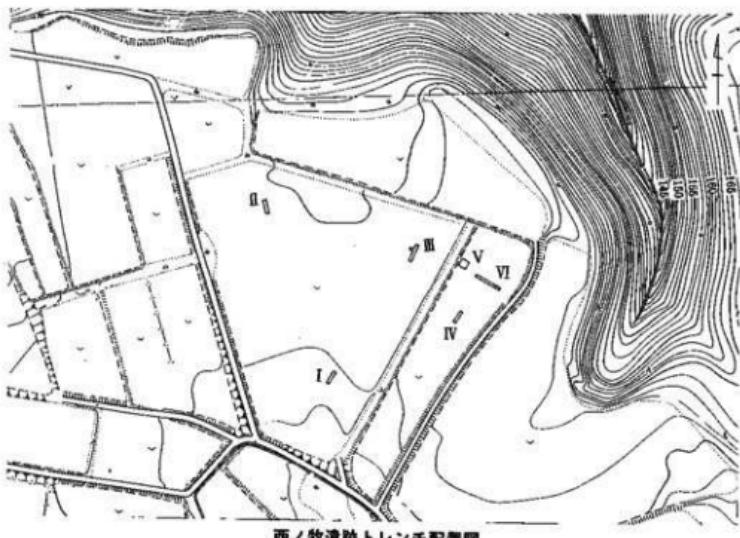
A地区（真崎遺跡）

北西へ舌状に延びる丘陵性台地上に立地し、分布調査で焼石、土器小片が採集されている。トレンチを3本設定して調査を行う。層の残存状態は、第Iトレンチ周辺ではアカホヤ下層以下が残存し、第IIトレンチ周辺は、畠地造成により西半が盛土で東半はアカホヤまで削平されている。第IIIトレンチ周辺は、黒色土が良好に残っている。遺物は、第Iトレンチ第VI層小白斑を含む硬質の黒褐色土から焼石、土器片が出土し、第IIIトレンチでも同層において焼石が出土している。

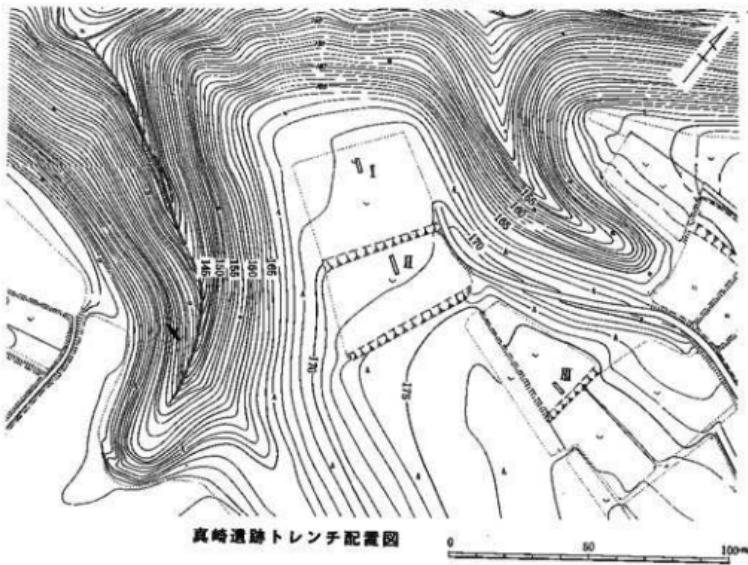
B地区（西ノ牧遺跡）

B地区は、谷をはさんでA地区の南に位置する。分布調査では弥生土器が採集され、また台地東ののり面の第VI層黒褐色土層中で焼石が含まれているのが確認された。トレンチは6本設定した。層の残存状態は、一部トレンチャーによる影響を受けているが、第II層黒色土が残存するなど概して良く残っている。

第IV～第VIトレンチ周辺では、調査中においても弥生土器が若干採集されたが、包含層は



西ノ牧遺跡トレンチ配置図



真崎遺跡トレンチ配置図

0 50 100m

第8図 西ノ牧・真崎遺跡トレンチ配置図

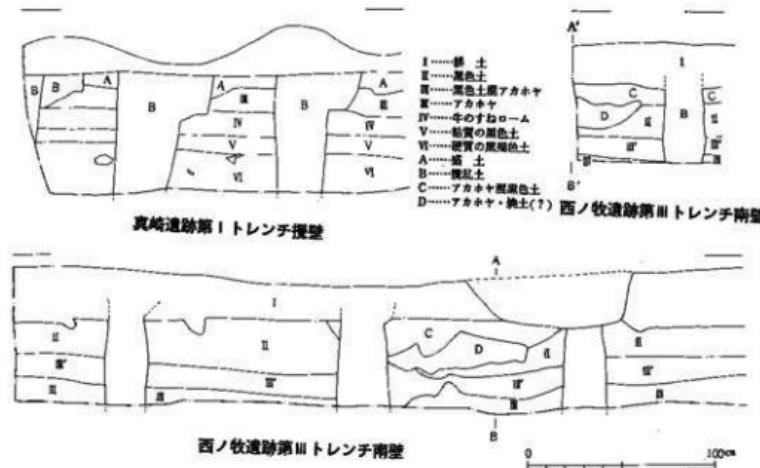
確認されなかった。第Ⅱトレンチは、畑造成により約70cm盛土されており、その下部に第Ⅱ層黒色土が良く残っている。黒色土より弥生土器小片が出土する。第Ⅲトレンチでは、遺物は出土していないが、第Ⅱ層黒色土中で幅75cm、厚さ最大で20cmほどのアカホヤと焼土（？）の堆積層が確認された。

B地区では、良好な包含層は確認されていないが、当地には、弥生時代及び縄文の文化層が存在すると考えられる。

C 地区

B地区の南西250mに位置する。分布調査では、糸切りの土師皿が2点採集されている。桑畠であったため設定できたトレンチは2本のみである。当地は既にアカホヤ直上まで削平されているが、アカホヤは良く残っている。調査は第VII層まで掘り下げたが、遺構、遺物等は検出されていない。

C地区は、限定された調査であったため、遺跡か否を判断するまでには至っていない。



第9図 真崎・西ノ牧遺跡土層図

第5節 松本遺跡

1. 遺跡の位置

松本遺跡は、西都市大字三納字松本他に所在し、西都市街の南西約2.5kmに位置する。三納地区は、北、西、南の三方を台地、丘陵が囲み、その中央部を三納川が東流し、河川周辺は沖積地が開け水田として利用されている。また、台地、丘陵の裾部には、小規模ながら河岸段丘が発達しているが、松本遺跡はその1つの河岸段丘上及び水田に立地する。遺跡は、土器が散布する他、国指定の松本塚古墳（前方後円墳）をはじめとする古墳が点在している。

2. 調査に至る経緯

三納川及びその支流周辺では、現在、三納地区県営は場整備事業が実施されている。それに伴い、昭和60、61年度、西都市教育委員会により松本塚古墳周辺に点在する小円墳周囲の発掘調査が実施されている。小円墳の中には周囲を削られ、現況が長径5m、短径3m前後の椭円形の墳丘となっているが、発掘調査によりこれらは径15~20mの円墳でいずれも埴輪をもつことが確認されている。また、現水田面の下1.5mほどの下層にはグライ化層あり、当層には加工痕のある木片等も採集されており、周囲に古墳以前の遺構の存在が予想される。

昭和62年度事業区内には国指定松本塚古墳が所在するため、古墳の保護について児湯農林振興局と協議を重ねている。そこで古墳の墳丘の規模、周濠等の確認を行うため昭和62年1月26日から2月19日までの間、発掘調査を行った。

3. 調査の方法と概要

松本塚古墳は、主軸方位北々東、現長約94mの2段築成の前方後円墳である。後円部径約47.5m、高さ約7.6m、前方部幅約69m、高さ約8mで前方部が開き、高さも若干高い。記録によると古墳周囲には約18mの周濠が巡っていたとあるが、周囲は大正年間に耕地整理も実施されており、現在、それを確認することはできない。古墳は、昭和12年原田仁、橋渡正夫氏により実測しているが、古墳の現況は実測図とほとんど一致している。本報告の墳丘部の実測図は、昭和12年のものを使用している。

今日の調査は、墳丘の規模、周濠等の確認を目的として主に古墳東半部分において実施した。トレンチは、幅1mを基本として第Iから第IVトレンチの9本を設定し、各トレンチを東・西と細分して呼称した。

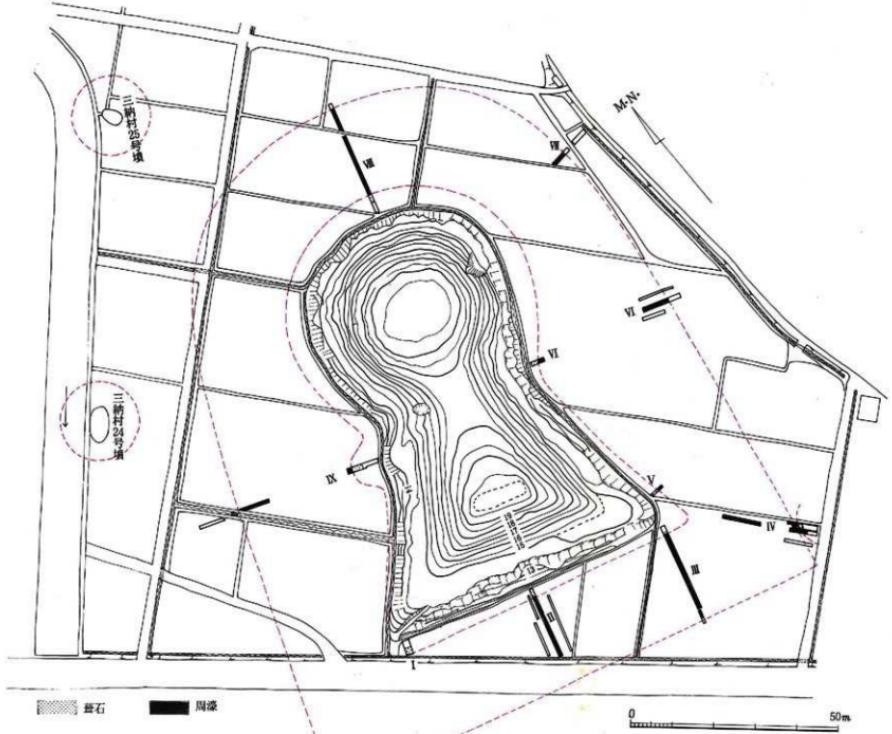
当地の基本層序は、第I層耕土、第II層輕石粒を含む黃灰色土、第III層粘質の黃灰色土、

第IV層粘質の黒褐色土、第V層は木葉、木片を多量に含む黒褐色土、第VI層は木葉、木片を含む粘質の暗オリーブ色土である。松本塚古墳の土壤については、宮崎県総合農業試験所の有村玄洋氏、赤木康氏に第IIトレンチ中央部で調査をお願いした。その結果については後記している。先に第I～第VI層まで分けた対応関係は次のとおりである。第I層—I Apg, 第II層—IB₂g, 第III層—II B₂g + II B₃g, 第IV層—III G₁ + III G₂, 第V層—III C₁ (G) + III C₂ (G) + III C₃ (G), 第VI層—III G₄ (G)。

第Iトレンチは前方部左隅に設定した。墳丘裾部は、現墳丘より約2.5m南の位置で確認され、削平を受けている。裾端部は県道横の排水路下に一部はいると思われる。遺物はほとんど出土していない。第IIトレンチは前方部側主軸線上に設定したもので、現墳丘すぐ下部で墳丘裾部が確認され、ほとんど削平を受けていない。第Vトレンチは、前方部右隅に設定したもので、畦畔下で墳丘裾部が確認され、水路により一部切られている。第VI西トレンチはくびれ部付近に設定したもので、畦畔下で墳丘裾部が確認された。第VIIトレンチは、後円部側主軸線上に設定したもので、現墳丘より約4.5m北で墳丘裾部が確認され、削平を受けている。確認された裾部の立ち上がりから推定して後円部も二段築成であったと考えられる。第IX西トレンチは造り出し部付近に設定したもので、現墳丘より約6.3m西で墳丘裾部が確認され、削平を受けている。遺物は、第Iトレンチ以外の第II、第V、第VI西、第VIIトレンチで埴輪小片が出土するが、その量は多くない。第IX東トレンチ出土の埴輪片はやや大片であり、墳丘裾部付近で円筒埴輪が押し潰された状態で出土している。なお、第VIIトレンチの第V層木葉、木片を含む黒褐色土より半圓丸方形の木製品が出土している。

周濠の外縁は、第III、第VI東、第VII、第VIII、第IX西の各トレンチで確認され、現墳丘より30～38mの位置である。遺物は、各トレンチより埴輪小片が出土しているが、その量はない。なお、第VI東トレンチ周濠部東で浅い堀り込みを確認されたが、直接古墳と関係ないと思われる。第IV東トレンチ周辺で葺石が検出され、その東で埴輪が出土している。埴輪は、埴輪基底部が樹立の状態で出し、その上部で朝顔形埴輪、円筒埴輪片が多量に出土した。埴輪の中には須恵質のものが含まれている。第IVトレンチでは以前古墳があったということであり、これがその一部と考えられる。

遺物は、埴輪片、木製品、中世の陶磁器が出土しているが、周辺では時期不詳の須恵器片も採集されている。第15図1が第IXトレンチ、2～5は第IVトレンチ東出土である。1は、胴部下半を欠く現高49cm、口径約35cmの円筒埴輪である。タガは3段確認され、断面はM字形である。透孔は、円形のものを対応する位置に1対もち、その下段の透孔に直交する位置



第10図 松本塚古墳トレンチ配置図及び墳丘・周濠復原図

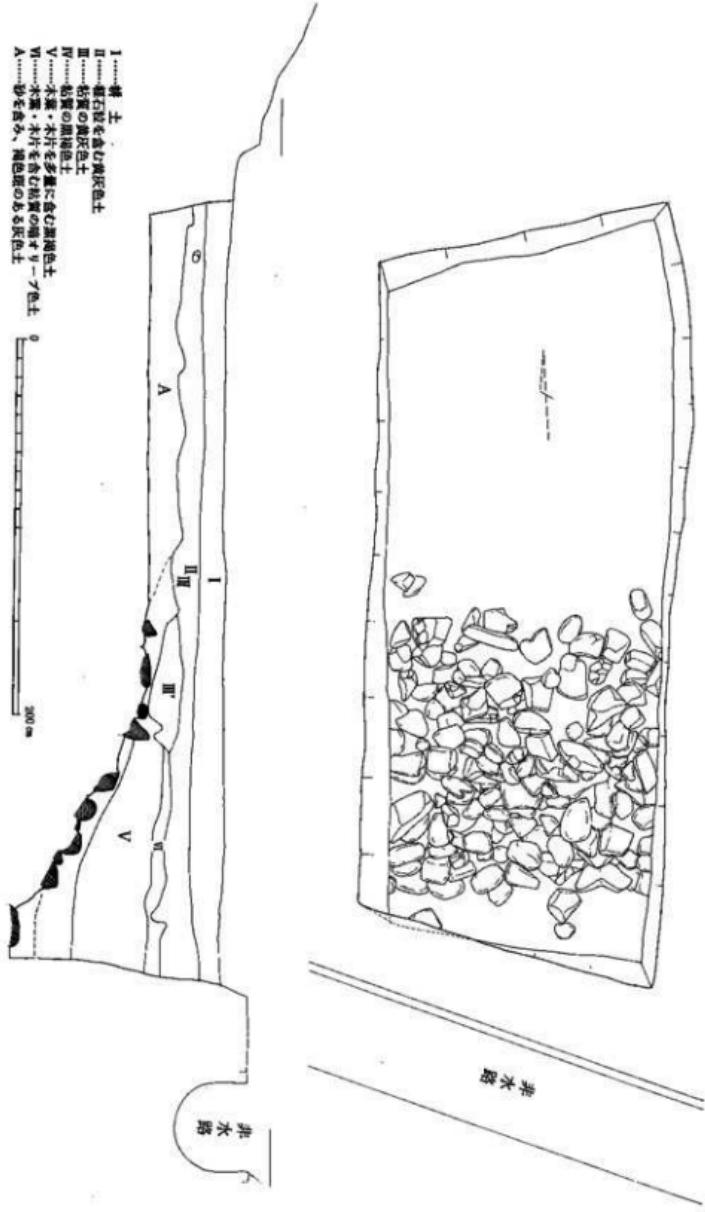
にくる。内面調整は口縁部がヨコハケ、胴部が指ナデを主とし、一部口縁部から胴部にかけてタテハケがみられる。外面調整はタテないしナナメハケである。4は、器高64.5cm、口径31.5cm、底径22cmタガを4段もち、第2段及び第4段に円形の透孔を相対する位置に一对もつ須恵質の円筒埴輪である。第2段、第4の透孔は直交する位置関係にある。内面調整は、胴部、基底部が指ナデ、口縁部がヨコハケである。外面調整はタテハケである。5は、器高63cm、口径28.5cm、底径23cm、タガを4段もち、第2段と第4段に円形の透孔を相対する位置に一对もつ焼成の良い灰白色を呈する須恵質の円筒埴輪である。第2段、第4段の透孔は直交する位置関係にある。内面調整は、胴部、基底部が指ナデ、口縁部がヨコ、ナナメハケである。外面はタテハケである。2・3は線刻のある円筒埴輪片である。2は第3タガ及び第3段に施文され、3は口縁部に施文されている。

図化した円筒埴輪は、川西宏幸氏編年の第V期にあたる。今回の調査した中で出土した円筒埴輪の大半は第V期のものであるが、第IVトレンチ東では、タテハケの後ヨコハケが施され、第IV期までさか上ると考えられるものも若干出土している。なお、この他、第IVトレンチ東、第VIトレンチ西及び第IXトレンチ東では朝顔形埴輪も出土している。

今回の調査は、松本塚古墳の規模、周濠の確認を目的としたが、松本塚古墳の周囲は、削平を受けており、実際は墳丘の全長が104m、二段築成の前方後円墳で盾形の周濠をもつことが確認された。確認された墳丘の規模は、後円部径61m、前方部幅79m、全長104mで片側に造り出しがつく。周濠は、後円部分幅22m、くびれ部付近幅35m、前方部分幅22m、前方部周濠外縁幅約128mで、周濠を含めた古墳の全長は約149mと推定される。

また、地元で古墳があったという地点、周濠外縁南東部で古墳の存在が確認されたが、その墳形及び規模、松本塚古墳との前後関係は今回の調査では確認されていない。

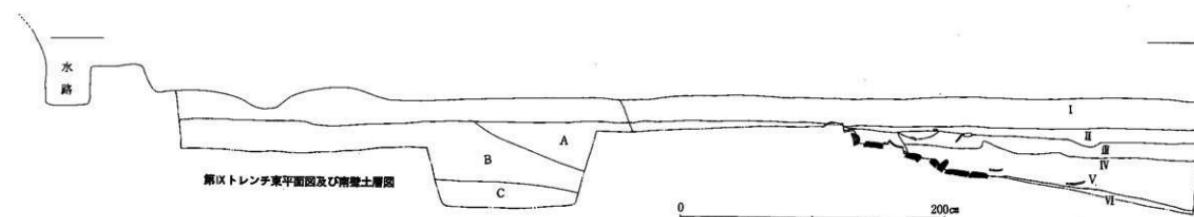
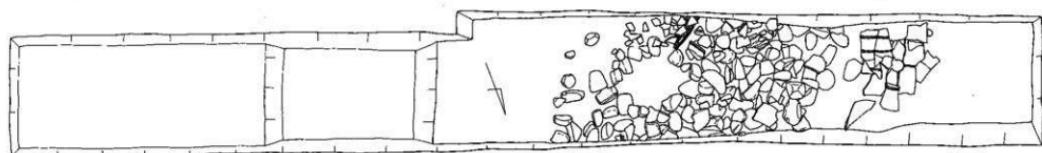
松本塚古墳の築造時期は、松本塚古墳の墳形及び出土した埴輪から6C初頭～前半と考えられるが、周濠外縁南東部で確認された古墳から第IV期までさか上ると考えられる埴輪片が出土していることから、5C代にさか上る可能性もある。



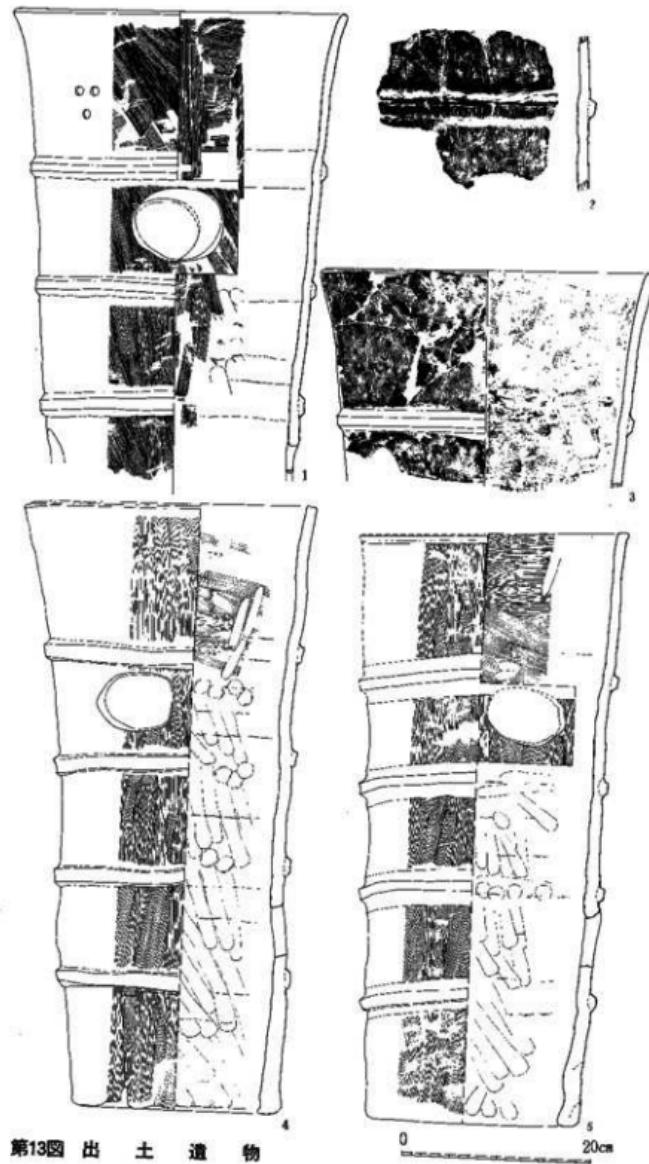
第1図 松本塚古墳第1トレンチ平面図・土質図



- I …………… 粘 土
- II …………… 砂石を含む黄灰色土
- III …………… 粘質の黄褐色土
- IV …………… 粘質の黒褐色土
- V …………… 水草・木片を多量に含む黒褐色土
- VI …………… 水草・木片を含む粘質の暗オリーブ色土
- A …………… 砂を含み、褐色斑のある灰色土
- B …………… 砂を含む灰オリーブ色土
- C …………… 粘質の灰オリーブ色土



第12図 松本塙古墳第III・VI西・VII・IX東トレンチ土層図・平面図



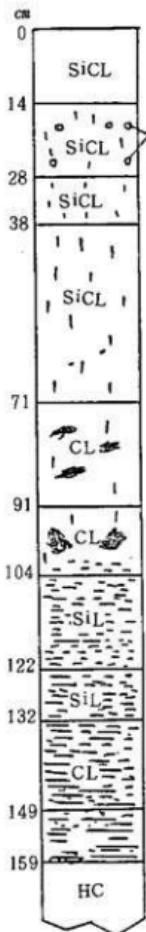
第13図 出土遺物

西都市松本塚古墳南側水田土壤断面調査

調査年月日：昭和62年2月10日

調査場所：西都市大字三納字田中

松本塚古墳南側水田



土壤群：灰色低地土（統群：灰色低地土下層有機質）

土壤断面記載

I Apg 0～14cm、暗灰黄（2.5Y4/2）色の微砂質
埴壤土（SiCL）、作土層で腐植を含み、発達弱度
の塊状構造を示す、赤褐色膜状斑に富み、糸根状斑を
含む。粘着性中、可塑性中、透水性中、植物根にとむ。
緻密度は18mm、層界はやや明瞭。

II B_{2g}、14～28cm、黄灰（2.5Y4/1）色の微砂質埴
壤土（SiCL）、発達中度の塊状構造を示す。黄褐色
の雲状斑に富み、糸状斑および膜状斑あり、マンガ
ン斑あり。粘着性中、可塑性中、透水性や小である。
緻密度は27mm、小粒状輕石粒を含む。スキ床層は、はっ
きりしなかった。層界はやや明瞭。

II B_{3g}、28～38cm、黄灰（2.5Y5/1）色の微砂質埴
壤土（SiCL）、発達弱度～中度の塊状構造を示す。
粘着性大、可塑性大、透水性中である。ち密度は20mm、
下部位で16mmを示し、軟かい。小礫あり。層界はやや
明瞭。

III C₁ (G) 38～71cm、黄灰（2.5Y4/1）色の微砂質埴
壤土（SiCL）、発達弱度の塊状構造を示す。赤褐
(5 YR4/6) 色の膜状斑、糸状斑にとみ、マンガ
ン斑あり。粘着性大、可塑性大、透水性中である。ち
密度は21mmである、層界はやや明瞭。

III C₂ (G) 71～91cm、黑褐（25Y3/2～3/1）色の埴壤
土（CL）でグライ層（G）である。上部位に褐（10
YR4/6）色の糸状斑を含む。粘着性大、可塑性大、

透水性中であり、かなり湿っている。小礫あり、層界はやや明瞭。

III G: 91~104cm、黄灰（2.5 Y4/1）と黒褐（10YR2/3）色の混色の埴壌土（CL）でグライ層（G）である。斑紋なし。粘着性、可塑性なし、透水性大で、下部位に植物遺体細片が多い。ち密度は14mm、層界はやや明瞭。

III C: 104~122cm、黒褐（10YR2/2）～極暗褐（7.5Y2/3）色の微砂質壌土（SiL）で、殆んど植物遺体細片であり、還元状態を示す、粘着性、可塑性なし、緻密度は12mmである。層界は明瞭である。

III C: 122~132cm、暗褐（7.5YR3/3）色の微砂質壌土（SiL）で、殆んど植物遺体片で、水平方向に堆積している。この層は変色（暗褐から黒）が著しい。多湿である。ち密度は10mm、層界は漸変。

III C: 132~149cm、褐（7.5YR4/4）色の壌土（L）で、殆んど植物遺体片で水平方向に堆積している。落葉遺体は形状が明瞭で多く認められる。還元状態で、変色（褐から黒褐）が著しい。多湿。ち密度は12mm、層界は明瞭。

III C: 149~159cm、暗オリーブ（5Y4/4）色で埴壌土（CL）、殆んど植物遺体（落葉が多い）が水平方向に堆積している。還元状態で多湿である。ち密度は9mmで軟らかい。層界は明瞭。

IVD 159~170+cm、緑灰（7.5GY6/1）色の重埴壌土（HC）で、粘着性大、可塑性大、透水性小である。グライ層（G）で多湿。ち密度は9mm、下方になるほど砂質になっている。（このことはゆるやかな堆積過程が行なわれたものと思われる。）

* 122~159cmで認められた植物葉遺体は、イチイガシが優占し、タブ、コジイの落葉も確認されたが、他の落葉片はかなり分解しており、同定不能であった。これらのことから、当時の植生状況は、イチイガシ群集が優占していたのではないかと考えられる。

（総合農試 有村玄洋 赤木 康）

図版

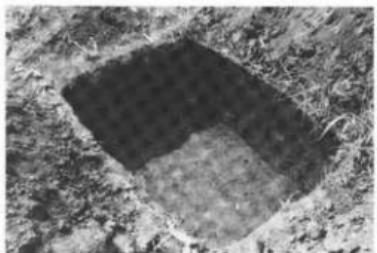
図版1 (北原牧地区遺跡)



A地区第Ⅰトレンチ



A地区第Ⅰトレンチ



A地区第Ⅲトレンチ



B地区第Ⅲトレンチ



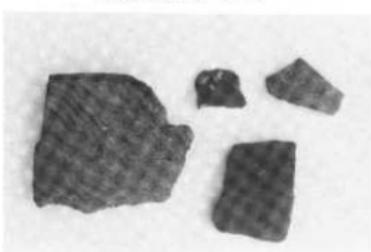
C地区第Ⅰトレンチ



D地区第Ⅲトレンチ



D地区第Ⅳトレンチ



出土 遺 物

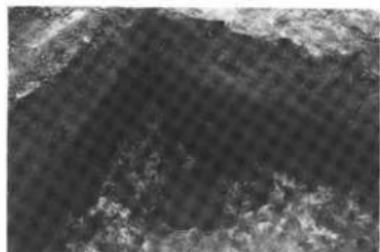
図版2 (樋田遺跡)



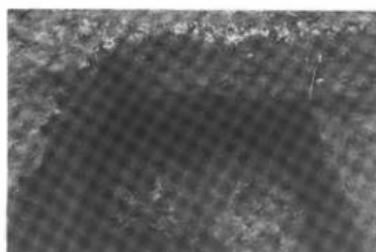
樋田遺跡遠景



第Ⅰトレンチ



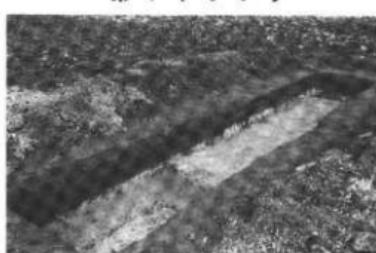
第Ⅰトレンチ



第Ⅰトレンチ



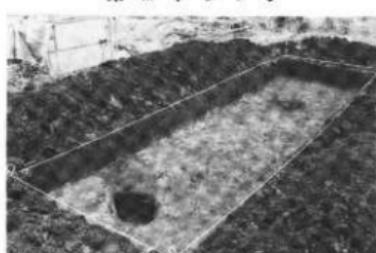
第Ⅱトレンチ



第Ⅲトレンチ



第Ⅳトレンチ

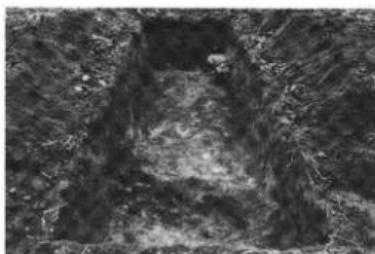


第VIIトレンチ

図版3（深瀬遺跡・地蔵ヶ森遺跡）



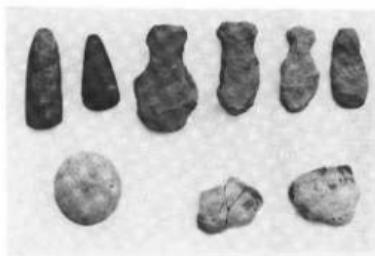
深瀬遺跡遠景



深瀬遺跡第IIトレンチ



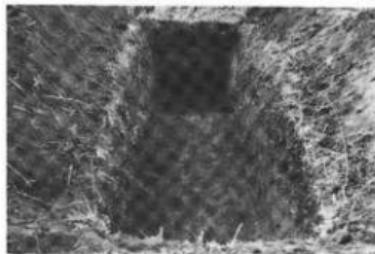
深瀬遺跡第IVトレンチ



深瀬遺跡表採遺物



地蔵ヶ森遺跡近景



地蔵ヶ森遺跡第IIトレンチ



地蔵ヶ森遺跡第IIIトレンチ



地蔵ヶ森遺跡表採遺物

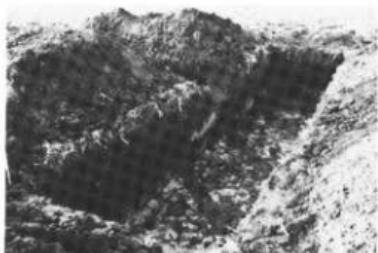
図版4 (城原地区遺跡)



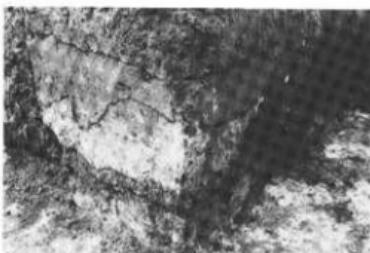
A地区第Ⅰトレンチ



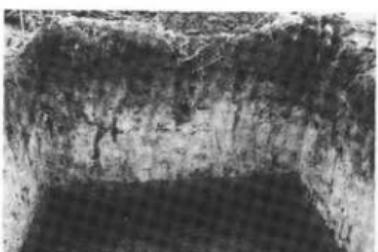
B地区近景



B地区第Ⅲトレンチ



B地区第Ⅲトレンチ



C地区第Ⅱトレンチ



紙屋城跡土壘



紙屋城跡中央空堀

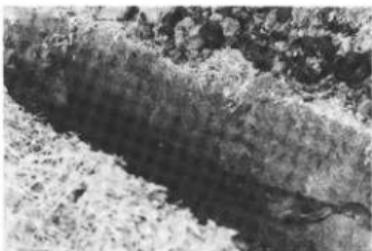


紙屋城跡北空堀

図版5 (松本塚古墳)



第Ⅰトレンチ



第Ⅲトレンチ



第VIトレンチ東



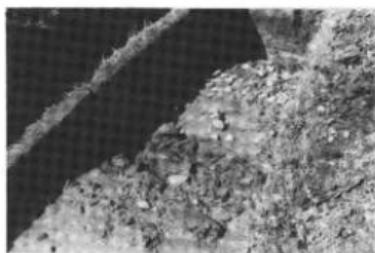
第VIトレンチ西



第VIIトレンチ



第IXトレンチ



第IVトレンチ東・北



第IVトレンチ東・北

昭和61年度農業基盤整備事業に伴う遺跡調査概報

昭和62年3月31日

発行 宮崎県教育委員会

編集 宮崎県教育庁文化課